

わがむらの昔ばなし

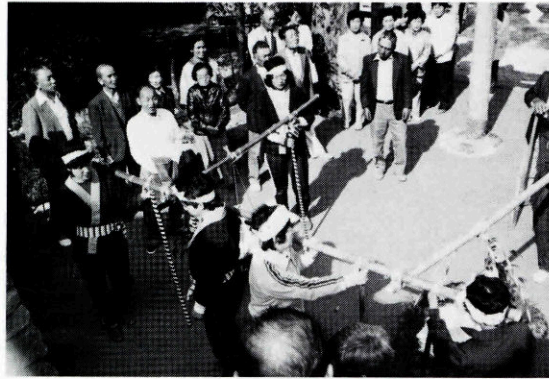
昔懐かしい祝歌（一名長持歌）

戦前は祝歌も度々聞くことが出来た。結婚式には、^{たなご}箆笥、^{たなご}長持ちの持参があり、上棟式には現物の米俵の献納があり、その他祝事の行事には餅撒があり、これ等の品物の運搬の道中には、必ず祝歌が付き物で、この歌声が聞こえて来なければ、到底祝事らしき雰囲気は生まれて来なかった。

遙か遠い彼方より、無限の祝福と祈りを込め、天迄届く美声を張り上げ、威勢の良い朗々たる祝歌の声は、お迎えする当家の満悦は申す迄もないが、一般の者も多分に悦びを分かち合うことが出来た。

戦後は社会の諸行事が一変し、祝歌も何時の間にか忘れ去られてしまった。

去年の十月十八日滝坂の黄幡神社の三五〇年祭と、改築落成祝賀式典が挙行された。その際一ノ瀬、中畑両自治会より餅撒の奉納があり、この撒餅持参に、久しぶりに祝歌が聞かされ懐かしさ二人であった。



中畑よりは美しき若妻三人一ノ瀬よりは稍々年輩なれど若き日の濃艶の面影を多分に秘めた淑女六人、何れも鉢巻姿も凛々しく、勇ましく出立ちで、荷負棒を担がれた。歌手は流石昔取った杵柄、高輪なれど、元氣潑刺壯者を凌ぐ音声は、天に木霊し地に鳴り響いた。神もさぞかし御満足遊ばされお悦びであったことと思う。

奉祝行事は一段と盛り上り盛会を極めた。しかしこれを以って祝歌が永遠に消え去るなら、誠に淋しき限り残念に思うは筆者のみならんや。
山下民恵氏、弘中喜平氏両君のご指導を賜り当日の祝歌の歌詞を記した後世に残す。
囃子は紙数の都合上一部省略

祝歌

ここは大坂 四十二の曲
ヨナー歌で越すナーエー
あんに見ゆるは 黄幡様よ
ヨナー目出度かるナーエー
今日は吉日 日和も良いし
ヨナー天赦日ナーエー
娘島田に 蝶々が留まる
ヨナー花じゃものナーエー
花と言はれりや咲かねばなら
ヨナー辱しやナーエー
目出度目出度が三つ重なりて
ヨナー五葉の松ナーエー
あんに見ゆるは 殿子の館

町民文芸

俳句

清風句会

(十二月)

蓮根掘り泥つきのま、送り来ぬ 高崎はま子
一献を右手にさげてふどころ手 齊藤 元
静かなる湖にたゆたふ冬の鳥 宮垣 萬女
ころくど野良着をとけば木の 上田 雪子
実かな 山野タケ子
盆栽やためつすがめつふどころ手 沖村美智子
懐手わが胸の上幼児来る 藤木 常
埒ちもなき事に執着ふどころ手 池田 久子
ほつぽつと酔を深めてふどころ手 仁保 民子
かた寄せてぬかる蓮田に舟を入れ 永田 石山
選者 追吟

短歌

三隅短歌会 (十二月)

夏戎衣で北支の荒野征きたるは 安藤 芳江
三十四歳の嚴冬なりき 伊藤シズエ
南面のなだりの樹々に白じろと 岡 松子
鳴ら越える夕陽まといて 岡 松子
宅配便娘より届けり温かき那須 高原の山うどの味
小春日の空をうつつして内海の水 立間 雅子
うらうらと青深みたり 久行 コト
散り果てし山茶花の枝手にどれ 古屋 博子
ば固きつばみをあまたもちたり りんどうの押花そえて文よせし 級友は乙女の心保ちて
道にそふ生垣の山茶花吹く風に 山中 敬子
白きがこぼるる小暗き夕べ 平川 喜敬
夕づけば島かげに泊つ積み船の 灯り寂しく眼底に沁む

な芽

